

第2回初年次教育学会企画 RT

ベネッセ大学生調査から捉える現代 初年次学生の特徴

－受験勉強スタイル，学習態度，学習成果の観点から－

【企画者】山田剛史（島根大学）・杉谷祐美子（青山学院大学）

【司会者】山田剛史（島根大学）・山田礼子（同志社大学）

【調査の趣旨説明】樋口 健（Benesse 教育研究開発センター）

【報告者1】望月由起（横浜国立大学）

【報告者2】杉谷祐美子（青山学院大学）

【報告者3】山田剛史（島根大学）

【コメンテーター】山田礼子（同志社大学）

2009/09/20

於：関西国際大学

ベネッセ大学生調査から捉える現代初年次学生の特徴

－受験勉強スタイル、学習態度、学習成果の観点から－

【企画者】山田剛史（島根大学）・杉谷祐美子（青山学院大学）

【司会者】山田剛史（島根大学）・山田礼子（同志社大学）

【調査の趣旨説明】樋口 健（ベネッセ教育研究開発センター）

【報告者1】望月由起（横浜国立大学）

【報告者2】杉谷祐美子（青山学院大学）

【報告者3】山田剛史（島根大学）

【コメンテーター】山田礼子（同志社大学）

1. 企画趣旨

2008年10月、ベネッセ教育研究開発センターは、“大学生を取り巻く社会状況や教育環境が変化するなかで、大学生の学習・生活全般にわたる意識や実態をとらえること”を目的として、全国の大学生4,070名を対象に「大学生の学習・生活実態調査」を実施し、翌3月に報告書を刊行した。今回の企画者および報告者は、研究委員として当調査の構成から分析・執筆を担当した。本ラウンドテーブルでは、現代における初年次学生の特徴を捉えるべく3名の話者提供から、特に、学習面における高校と大学のつながり、大学における学習態度、学習経験、そして学習成果といった点に焦点を当てて報告を行う。

2. 調査の概要

《対象者》留学生・社会人経験者を除く18～24歳の大学1～4年生4,070名（内訳：1年生1,017名、2年生1,013名、3年生1,017名、4年生1,023名／男子2,439名、女子1,631名）。

《抽出方法》約80万人のモニター母集団より、文部科学省『平成20年度学校基本調査（速報）』の男女比・学部系統別の比率を参考に、無作為に抽出（インターネット調査）。

《主な調査内容》高校での学習実態／大学選考で重視した点／大学への志望度／大学の満足度／大学生活で力を入れてきた活動／授業への出席率／大学での学習状況／大学生活を通じて身につけたこと（大学での学習成果）など

3. 大学受験勉強スタイルと入学後の学習態度との関連（望月）

大学受験競争の過熱解消や受験生の負担軽減等を目的とし、大学入試改革は長年にわたり議論されてきた。近年の大学入試政策では、選抜方法や評価尺度の多元化が積極的に推進され、AO入試をはじめとした特別選抜入試を実施する大学が著しく増加している。

こうした状況に伴い、「受験勉強＝教科学習」という、従来一般的であった大学生の受験勉強スタイルにも揺らぎがみられ、多様化しているものと思われる。大学生の学力低下の一因として、「大学に入学するための選抜競争の緩和」が多々指摘されるが、受験勉強スタイルの多様化は、大学生の学力水準の問題のみならず、入学後の学習態度にもかかわる問題ではなかろうか。

そこで本報告では、現代の大学生の受験勉強スタイルについて実証的に示すとともに、大学入学後の学習態度との関連について分析を行った。

その結果、「志望理由書・自己推薦書の作成」「面接の準備」に取り組んだ学生が年々増加し、1年生と4年生では明らかな有意差もみられた。彼らは「推薦入試」「AO入試」により、大学に入学している傾向も確認された。

こうした受験勉強スタイルで大学に入学した初年次学生は、入学後の学習態度が同学年全体の平均値より高い側面も多く、とりわけ、授業に対する基本姿勢の高さが目立つ結果が示された。し

かし、彼らの性別や大学入学偏差値帯などにより、その高さに有意差のある学習態度もあり、慎重な解釈が必要であろう。

4. 高校での学習態度と大学での学習態度および学習経験との関連（杉谷）

本報告では、初年次学生が大学生にふさわしい能動的な学習態度を身につけるにあたり、どのような課題があるかを探るため、第1に高校から大学への学習態度の変化を、第2に大学での学習態度と高校での学習態度との関連を、第3に学習態度と学習経験との関連を検討する。

第1に、高校時代と現在の学習態度について、内容的に近い設問の回答を比較した。「授業の予習」、「授業の復習」、「課題提出」などの基本的な学習習慣は高校時代の平均値より上回ったのに対して、「教員への質問」、「わからないことを自分で調べる」などの積極性・自発性の面では低下、もしくはほぼ変わらぬ結果となった。こうした傾向は、上級学年よりも初年次生にやや顕著であった。

第2に、現在の学習への取組24項目について因子分析を行った結果、「ディスカッション等への貢献」、「受講の基本的マナーの遵守」、「興味に基づいた自主学习」、「計画的・継続的自主学习」、「授業の予習・復習」の5つの因子を抽出した（主因子法、Promax回転）。高校時の学習への取組の程度で高群、低群と分類し、上記の各下位尺度得点を算出した結果、「授業の予習・復習」を除く4因子で、高群の平均が低群のそれを上回り、高校時の学習態度が影響することが明らかになった。

第3に、同様に高校時の総合的学習の授業経験と大学の授業経験の程度によって、各下位尺度得点を算出した。「授業の予習・復習」を除く4因子で、おおむね、高校・大学の授業経験が豊富な学生のほうが少ない学生よりも高い値を示した。とくに、大学の授業経験のほうでは差がみられ、グループワーク、ディスカッション、プレゼン等の機会を取り入れた授業が効果的であった。

5. 学習成果に影響を及ぼす要因の検討—学習経験と学生生活類型を中心に—（山田）

本報告では、初年次学生（N=1,017）における

学習成果に影響を及ぼす要因について、第1に授業内での学習経験の観点、第2に大学生生活経験に基づく学生類型の観点から検討を行う。

第1の点に関して、本調査では学習成果に関する項目を計28項目選出しており、予め因子分析によって4因子解（F1.全般的技能、F2.数的処理、F3.外国語、F4.積極的態度）が確認されている（山田、2009）が、ここでは学習成果28項目と授業経験19項目との相関係数を算出した。結果、31の項目間において $r=.30$ （ $p<.001$ ）以上の相関が見られた。特に、効果の高かった授業形態として、「ディスカッションの機会を取り入れた授業」「実験や調査を取り入れた授業」「グループワークなどの共同作業をする授業」「多様な他者とのコミュニケーションが取れる授業」「授業評価の結果を反映させた授業」が挙げられる。

第2の点に関して、大学生生活経験へのコミットメントの程度による学習成果の差異について検討を行う。具体的には、授業、サークル、授業以外の自主勉強、アルバイト、趣味、読書の6つの活動への取組の程度に基づき類型化を行う。クラスター分析により、5つの学生生活類型（1.全ての活動に積極的なハイパーフォーマー群48名、2.正課・正課外活動への積極的参加群79名、3.自主的学習への積極的参加群96名、4.全ての活動に消極的な群155名、5.正課外活動への積極的参加群89名）が抽出された。これを独立変数、学習成果4因子を従属変数とした一要因分散分析の結果、全てに1%水準の有意差が見られた。多重比較（Tukey法）の結果、概ねタイプ1および2がタイプ4および5に比して有意に高い値を示していた。

6. 最後に

本調査は網羅的に現代大学生の学習・生活実態を捉えるものとなっており、今回はその第一弾報告になる。今後、様々な観点から分析・報告を行っていく予定である。当日はフロアーのみなさまと有意義な情報交換の場としたい。

【文献】 Benesse 教育研究開発センター編（2009）大学生の学習・生活実態調査報告書 研究所報 Vol.51 (http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/index.html)

「大学生の学習・生活実態調査」の概要

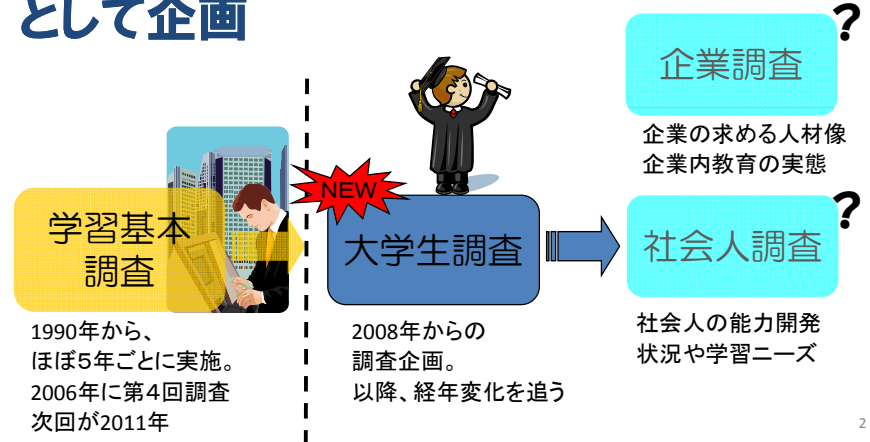


平成21年9月20日

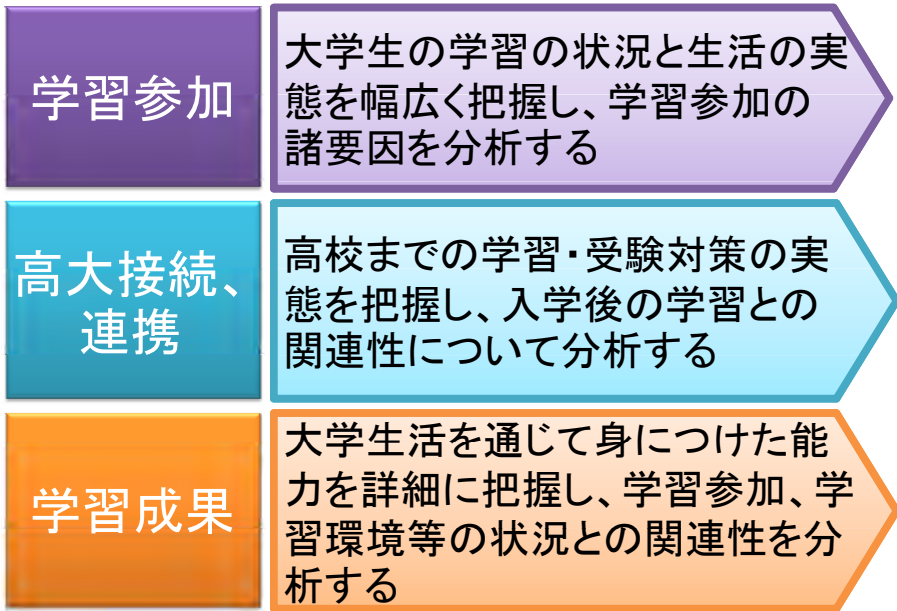
Benesse 教育研究開発センター
樋口 健

調査企画・実施の意図

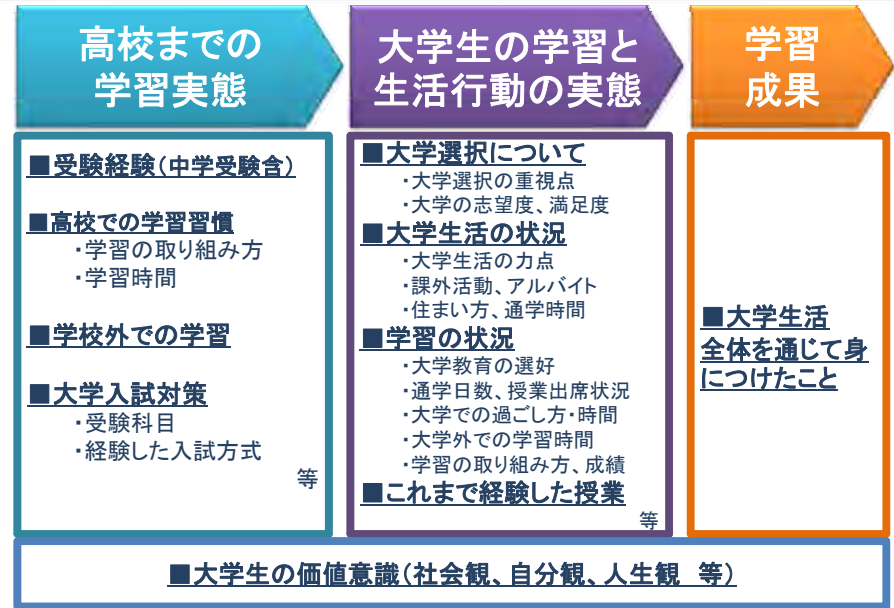
大学生の学習・生活の状況をファクトベースで把握する、ベースラインサーベイとして企画



調査の視点(実践での利用を意識)



設問の枠組み



実施概要

- 調査方法 インターネット調査
- 対象 全国の大学1～4年生
- 有効回答数 4,070名

*平成20年度学校基本調査の性別・学部系統別の比率を参考に、母集団に可能な限り近似するように割り付けて回収。

- 調査時期 2008年10月上旬

体制

調査企画・分析メンバー

山田 礼子 先生(主査) 同志社大学

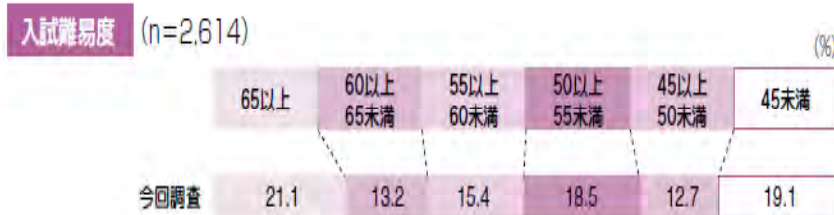
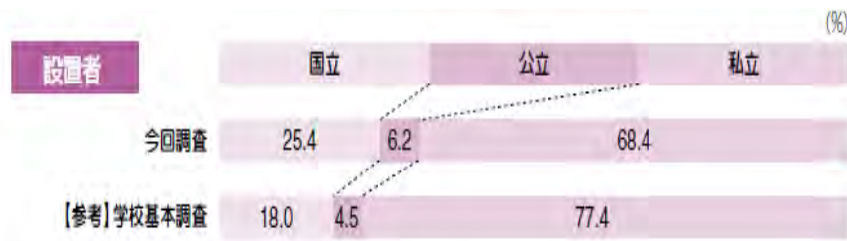
杉谷祐美子 先生 青山学院大学

山田 剛史 先生 島根大学

望月 由起 先生 横浜国立大学

樋口 健・十河直幸(事務局)
ベネッセ教育研究開発センター

基本属性(その1)



基本属性(その2)



学部系統の区分	調査票で示した学部系統
人文科学	人文系統 (文学、心理学、文化学など) 外国語学系統 (外国語学部など) 国際学系統 (国際関係学、国際情報など)
社会科学	社会学系統 (社会学部、社会福祉学部など) 法学系統 (法学、政治学、政治経済学など) 経済学系統 (経済、経営、商学部、流通学など)
理工	理学系統 (理学部、生命科学、地球環境など) 工学系統 (理工学部、システム工、情報工など)
農水産	農学・水産学系統 (農、水産、生物資源、獣医、酪農など)
保健その他	保健衛生系統 (保健、保健医療、看護、看護医療など) 医学 (医学部) 歯学 (歯学部) 薬学系統 (薬学部など)
教育	教育学系統 (学校教育学など)
その他	生活科学系統 (家政、食物栄養、人間発達、保育など) 芸術系統 (造形、音楽など) 総合科学 (総合) 系統 (総合科学、教養、環境情報など)

初年次教育学会 第2回大会(於:関西国際大学) 2009/9/20
ラウンドテーブル

ベネッセ大学生調査から捉える現代初年次学生の特徴
—受験勉強スタイル、学習態度、学習成果の観点から—

大学受験勉強スタイルと 入学後の学習態度との関連

—近年特有のスタイルに着目して—



【報告者1】

横浜国立大学 望月 由起

問題関心・背景

大学受験競争の過熱解消や受験生の負担軽減等を目的とした**大学入試改革**議論



近年の大学入試政策では、選抜方法や評価尺度の多元化が積極的に推進

AO入試をはじめとした**特別選抜入試を実施する大学の著しい増加**



「受験勉強＝教科学習」という、従来一般的であった**大学受験の勉強スタイルにも揺らぎがみられ、多様化**しているのでは



大学生の学力低下の一因として、18歳人口の減少や**大学入試方法の多様化**による「大学入学選抜競争の緩和」が指摘されるが…

受験勉強スタイルの多様化は、大学生の学力レベルの問題のみならず、**大学入学後の学習態度にもかかわる問題**では

2

分析対象・課題

・**分析対象**: 大学1年生1,017名 (※比較対象として他学年にも目を向ける)

・**分析項目**:

- ①大学受験対策として取り組んだこと
- ②現在の大学・学部への入学方法
- ③大学の授業への取り組み

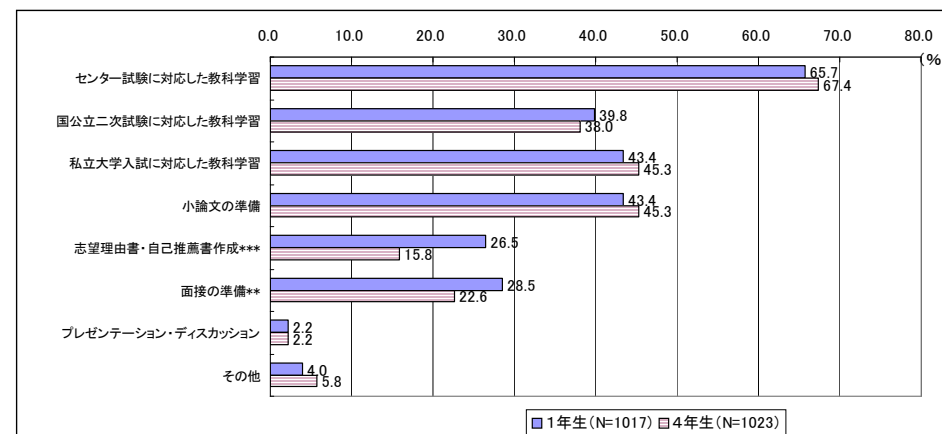
ほか、「性別」「大学名」「学部系統」を分析項目とした

・**分析課題**:

- 1) 近年の大学生の受験勉強スタイルの傾向
- 2) 受験勉強スタイルと入学方法との関連
- 3) 近年の大学生の入学後の学習態度の傾向
- 4) 受験勉強スタイルと入学後の学習態度との関連
(近年特有のスタイルに着目して)

3

課題1) ①受験勉強スタイル別の 経験率(1年生と4年生の比較)

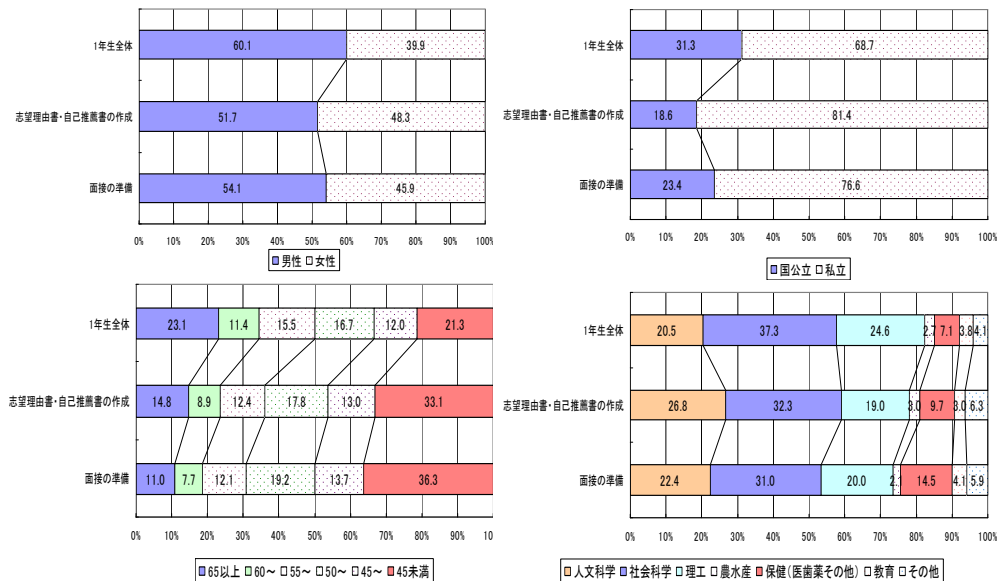


※***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05

「志望理由書・自己推薦書作成」「面接の準備」の経験率が明らかに増加(相関0.59,p<.001)
⇒近年特有のスタイル

4

課題1) ②近年特有のスタイル経験者



全体と比べると、「女子」「私立大」「入学偏差値45未満」「人文・保健(医歯薬その他)系」に多い

課題2) 受験勉強スタイルと入学方法の関連

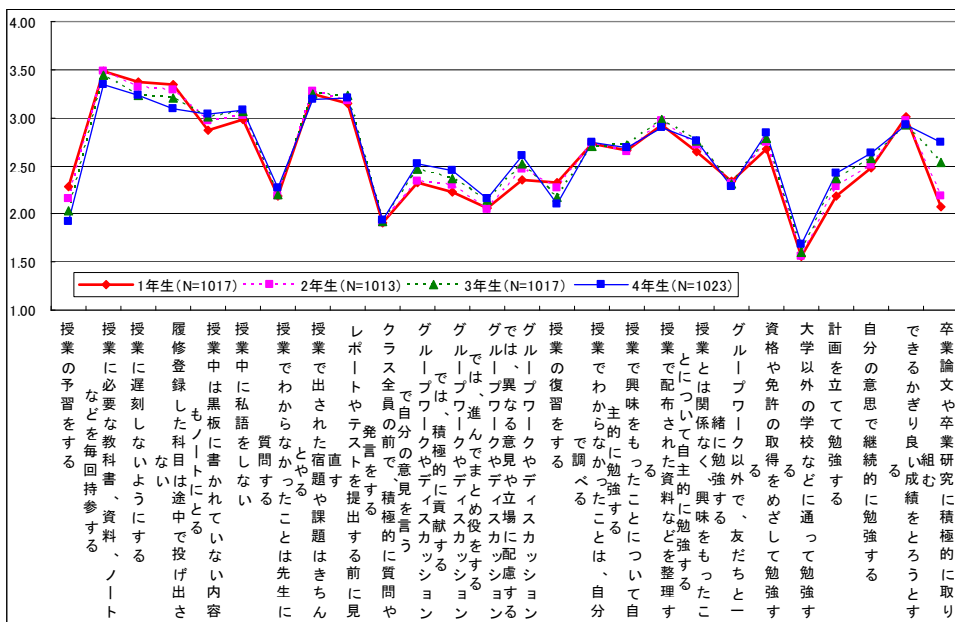
Pearson の相関係数

	一般入試 (N=555)	センター入試 (N=129)	推薦入試 (N=207)	附属推薦 (N=44)	AO入試 (N=56)	帰国入試 (N=6)	その他 (N=20)
センター試験に対応した教科学習	.38 ***	.23 ***	-.37 ***	-.25 ***	-.17 ***	-.11 ***	-.14 ***
国公立二次試験に対応した教科学習	.37 ***	.02	-.25 ***	-.17 ***	-.16 ***	-.06 *	-.10 **
私立大学入試に対応した教科学習	.18 ***	.03	-.14 ***	-.09 **	-.05	.01	-.08 **
小論文の準備	-.19 ***	-.05	.22 ***	-.03	.09 **	.13 ***	.01
志望理由書・自己推薦書作成	-.41 ***	-.16 ***	.45 ***	.06	.25 ***	.04	.03
面接の準備	-.43 ***	-.14 ***	.41 ***	.08 *	.30 ***	.09 **	.05
プレゼンテーション・ディスカッション	-.11 ***	-.06	.06	.00	.23 ***	-.01	-.02
実技(体育・美術・音楽・デザインなど)	-.03	.07 *	-.02	.00	-.01	-.01	.03
その他	-.15 ***	-.06 *	.01	.28 ***	.02	.05	.22 ***

近年特有のスタイルは、「推薦入試」(や「AO入試」)で入学した学生に多く、「一般入試」で入学した学生には少ない

***p<.001, **p<.01, *p<.05

課題3) 入学後の学習態度(学年別比較)



学年が低いほど、「授業への基本姿勢」は高く、「積極性・自主性・計画性・継続性」は低い傾向

課題4) ①近年特有のスタイル経験者の入学後の学習態度(1年生平均との比較)



・1年生平均よりも、多くの項目で高い(特に、「志望理由書・自己推薦書作成」経験者)
 ・中でも、「授業に対する基本姿勢」「結果・成果を残す意欲」「自主性」に関する項目で高い

課題4)②「志望理由書・自己推薦書の作成」 経験と入学後の学習態度(1年生と4年生)

1年生で有意差が示された項目:26項目中14項目

1年生 4年生

授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	経験>経験せず	***	*
授業に遅刻しないようにする	経験>経験せず	**	**
履修登録した科目は途中で投げ出さない	経験>経験せず	***	***
授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	経験>経験せず	***	***
授業でわからなかったことは先生に質問する	経験>経験せず	***	
授業で出された宿題や課題はきちんとやる	経験>経験せず	***	**
レポートやテストを提出する前に見直す	経験>経験せず	*	*
クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	経験>経験せず	*	
授業でわからなかったことは、自分で調べる	経験>経験せず	**	
授業で興味をもったことについて自主的に勉強する	経験>経験せず	*	**
授業で配布された資料などを整理する	経験>経験せず	**	**
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	経験>経験せず	**	*
資格や免許の取得をめざして勉強する	経験>経験せず	***	
できるかぎり良い成績をとろうとする	経験>経験せず	***	**

※***p<.001, **p<.01, *p<.05

- すべての項目で「経験>経験せず」
- 「授業に対する基本姿勢」「結果・成果を残す意欲」「自主性」に関する項目で有意差が示された
- 10項目は、4年生でも有意差が示された(「授業に興味をもったことへの自主的な学習」での有意差は、1年生より大きい)

9

課題4)③「面接の準備」経験と入学後の 学習態度(1年生と4年生)

1年生で有意差が示された項目:26項目中10項目

1年生 4年生

授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	経験>経験せず	*	**
授業に遅刻しないようにする	経験>経験せず	**	**
履修登録した科目は途中で投げ出さない	経験>経験せず	***	***
授業でわからなかったことは先生に質問する	経験>経験せず	**	
授業で出された宿題や課題はきちんとやる	経験>経験せず	**	*
レポートやテストを提出する前に見直す	経験>経験せず	**	*
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	経験>経験せず	**	
資格や免許の取得をめざして勉強する	経験>経験せず	**	
大学以外の学校などに通って勉強する	経験<経験せず	*	
できるかぎり良い成績をとろうとする	経験>経験せず	**	

※***p<.001, **p<.01, *p<.05

- 「経験>経験せず」とは限らない
- 「授業に対する基本姿勢」に関する項目で有意差が示された
- 5項目は、4年生でも有意差が示された(「授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する」での有意差は、1年生より大きい)

10

課題4)④近年特有のスタイル経験者内での 差異(性別・大学設置者・入学偏差値帯・学部系統別)

「志望理由書・自己推薦書の作成」

「面接の準備」

<偏差値60以上か未満か> 60以上N=40, 60未満N=129

授業に遅刻しないようにする	以上<未満	*
グループワークやディスカッションでは、進んでまとも役をす	以上>未満	*

<男子か女子か> 男子N=157, 女子N=133

履修登録した科目は途中で投げ出さない	女子>男子	*
授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	女子>男子	***
資格や免許の取得をめざして勉強する	女子>男子	**

<学部系統別> 保健N=72, 教育N=39, 農水産N=27

資格や免許の取得をめざして勉強する	保健(医歯薬)>農水産	*
資格や免許の取得をめざして勉強する	教育>農水産	*

<国公立か私立か> 国公立N=68, 私立N=222

自分の意思で継続的に勉強する	国公立>私立	*
----------------	--------	---

<偏差値60以上か未満か> 60以上N=34, 60未満N=148

授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	以上<未満	*
授業に遅刻しないようにする	以上>未満	**
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	以上>未満	*

<偏差値50以上か未満か> 50以上N=56, 50未満N=126

授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	以上<未満	**
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	以上>未満	*
大学以外の学校などに通って勉強する	以上<未満	*
自分の意思で継続的に勉強する	以上>未満	*

※***p<.001, **p<.01, *p<.05

11

おわりに

一本報告からみえてきた、現代初年次学生の特徴

1. 多様な受験勉強スタイル

- センター試験対応の経験率は2/3に及ぶが、国公立二次・私立大対応や小論文の経験率が1/2弱、志望理由書・自己推薦書作成や面接準備が1/4を示し、多様な受験勉強スタイルの様相がみられた
- 志望理由書・自己推薦書作成や面接準備は、1年生と4年生の経験率でさえ、明らかな有意差が示され、「近年特有のスタイル」であると考えられる

2. 大学の授業に対する基本姿勢の望ましさ

- 学年が下がるほど、「授業に対する基本姿勢」の得点が高い(逆に、「積極性」「自主性」「計画性」「継続性」に関する得点は低い) ※自己評価

※初年次学生の中でも、「近年特有のスタイル」経験者に関して言えば・・・

- 他の初年次学生以上に「授業に対する基本姿勢」の得点が高く、中でも「志望理由書・自己推薦書作成」経験者は、「結果・成果を残す意欲」や「学習への自主性」に関する得点も高い
- 「近年特有のスタイル」経験者内でも、「リーダーシップ」「学習に対する自主性・継続性」は、難関大学・国公立大学の学生が有意に高く、「授業への基本姿勢」「授業外での学習」は、一般大学の学生や女子が有意に高い

12

高校での学習態度と大学での 学習態度および学習経験との関連

杉谷祐美子

(青山学院大学 教育人間科学部)

1

1 はじめに

- 初年次教育の主要な到達目標の一つ
 - 高校と大学の違いを理解できる
 - 高校までの「生徒」としての学びと大学からの「学生」としての学びの違いを理解できる
- 学習者たる「学生」への注目
 - 大学が提供する教育環境だけでなく、大学教育に対する学生の「かまえ」が、大学教育のインパクトを形成する重要な要因
(金子元久『大学の教育力』ちくま新書、2007年)
 - 「何を教えるか」→「何ができるようになるか」
(中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』2008年)
 - 大学生の学習態度の形成メカニズムに関する研究の必要

2

■ 本報告の目的

- 初年次学生が大学生にふさわしい能動的な(主体的な)学習態度を身につけるにあたり、どのような課題があるかを探索的に検討する

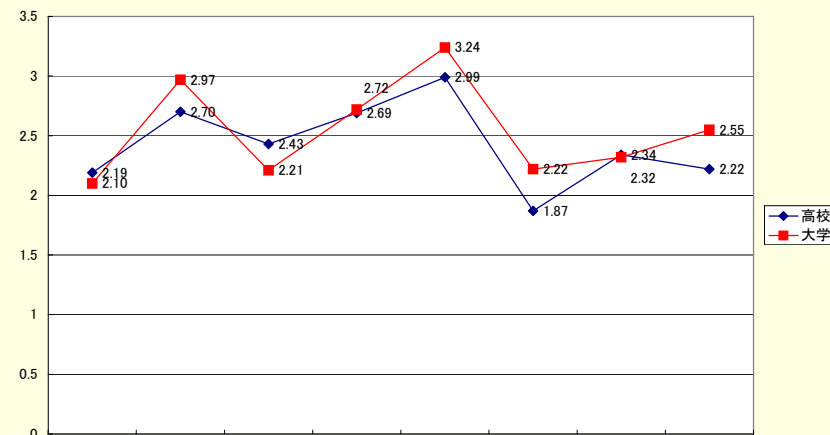
■ 3つの検討課題

- 高校から大学にかけて学習態度は変化しているか(2)
- 大学における学習態度は、高校における学習態度と関連があるのか(3)
- 大学における学習態度は、高校での学習経験、および大学での学習経験と関連があるのか(4)

3

2 高校から大学にかけての学習態度の変化

図1 学習態度の平均値比較



①授業の予習をする
②授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる
③授業でわからなかったことは先生に質問する
④授業でわからなかったことは自分で調べる
⑤授業で出された宿題や課題はきちんとやる
⑥授業の復習をする
⑦計画を立てて勉強する
⑧自分の意思で継続的に勉強する

4

図1

- ②ノートテイキング, ⑤宿題や課題をきちんとやる, ⑥授業の復習, ⑧継続的に勉強するなど、基本的な学習習慣は高校時代よりも上昇。単位修得のために、大学教育のスタイルに合わせざるをえない面もあるか？
- ③教員への質問, ①授業の予習, は高校時代よりも低下。④わからないことを自分で調べる, ⑦計画立てて勉強する, はほとんど変化なし。積極性, 自発性の面では伸びがみられない。

注: 図1の平均値は「全くあてはまらない(1)」~「とてもあてはまる(4)」の4件法の回答。図中に示したのは大学での取り組みに関する質問であり、高校時代については質問の表現が若干異なる。最も異なるのは、⑥「授業で習ったことは、その日のうちに復習した」、⑧「自分の意思で毎日コツコツ勉強した」の2項目。

図2 学年別にみた学習態度の平均値比較

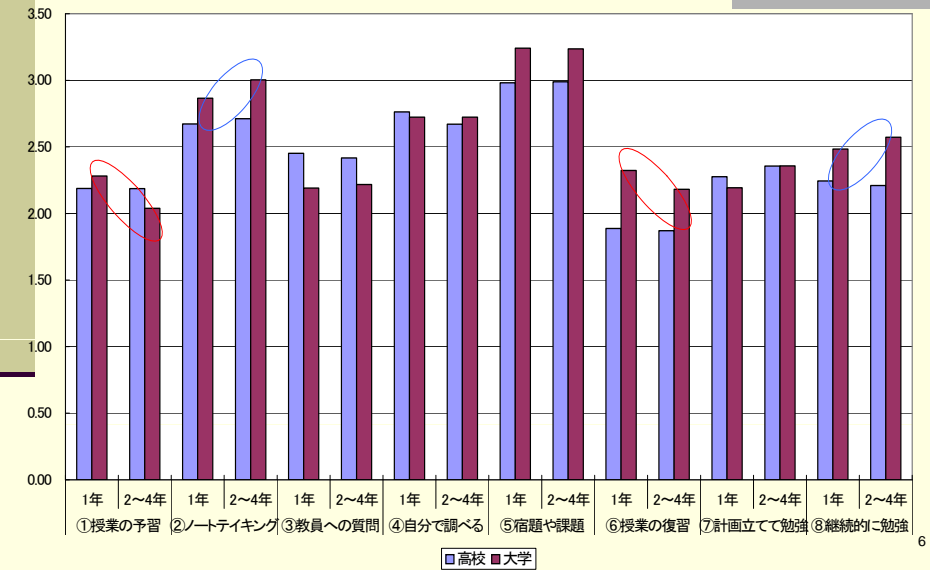


図2

- 学年間で大きな差はみられない。
- 若干だが、初年次生は2年次生以上に比べて、①授業の予習, ⑥授業の復習において、高校から大学にかけて伸びをみせている。
- 若干だが、2年次生以上は初年次生に比べて、②ノートテイキング, ⑧継続的な勉強において、高校から大学にかけて伸びをみせている。
- これら以外の項目では、学年進行の影響が少ない。

3 大学での学習態度と高校での学習態度との関連

表1 大学におけるふだんの学習への取り組み(全体・学年別)

	全体 (4,070)	1年生 (1,017)	2年生 (1,013)	3年生 (1,017)	4年生 (1,023)
授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	91.1	92.8	92.1	91.3	88.4
授業で出された宿題や課題をきちんとやる	87.4	88.3	88.4	87.5	85.4
授業に遅刻しないようにする	84.4	87.3	85.6	81.8	82.9
レポートやテストを提出する前に見直す	83.7	81.9	83.8	84.5	84.4
履修登録した科目は途中で投げ出さない	81.2	86.1	83.4	79.2	76.0
授業で配布された資料などを整理する	74.9	73.8	76.6	76.6	72.9
授業中に私語をしない	74.4	71.7	74.1	75.1	76.6
できるかぎり良い成績をとろうとする	73.4	75.8	74.1	72.0	71.4
授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	72.9	69.2	72.8	74.3	75.2
授業でわからなかったことは先生に質問する	34.9	33.5	34.2	35.1	36.8
資格や免許の取得をめざして勉強する	63.2	60.2	61.9	64.0	66.7
授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する	61.9	57.8	61.5	63.5	64.9
授業で興味をもったことについて自主的に勉強する	61.7	60.5	59.4	64.0	62.8
自分の意思で継続的に勉強する	55.6	52.9	52.1	57.3	59.9
グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	53.5	46.2	52.4	55.2	60.2
卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む	49.0	36.1	39.7	56.3	63.9
グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	46.8	42.0	42.4	49.4	53.4
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	43.7	45.9	43.6	42.4	43.0
計画を立てて勉強する	41.8	35.4	40.3	43.9	47.6
グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する	41.6	35.3	38.6	44.3	48.4
授業でわからなかったことは、自分で調べる	66.0	65.8	65.8	64.9	67.1
授業の復習をする	34.6	40.1	37.7	31.6	29.0
授業の予習をする	32.5	43.1	34.6	28.3	24.3
グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする	27.1	25.9	24.4	27.7	30.6
クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	21.6	20.3	20.8	22.6	22.5
大学以外の学校などに通って勉強する	16.0	13.3	13.7	16.3	20.5

注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) ()内はサンプル数。

注3) イエローは全体よりも10ポイント以上高いもの、もしくは低いものを示す。

注4) ピンクは全体よりも5ポイント以上高いもの、もしくは低いものを示す。

注5) ベネッセ報告書p.89より。なお、配列やマークの表示方法は変えている。

表1

- 授業に臨むうえでの基本的な学習態度は7割以上、授業外の自主的な学習は6割前後の学生が該当(ただし、自主的な学習に関して「とてもあてはまる」と回答した学生は2割弱)。
- グループワークやディスカッションは、より積極的に関わる行為ほど比率が低下。
- 授業の予習・復習は3分の1程度が該当し、最も低い。
- 初年次生は上級学年に比べて、正課中心に予習・復習に取り組む比率が高いが、グループワークやディスカッションなどへの参加、自主的な学習の比率は低い。

表2 大学における学習への取り組みの因子分析結果(Promax回転後の因子パターン)

	I	II	III	IV	V
12 グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する	.96	.04	-.02	-.03	-.05
11 グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	.94	.03	.04	-.07	-.07
13 グループワークやディスカッションでは、進んでまめ役をする	.80	-.06	-.07	.06	.09
14 グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	.74	.04	.13	-.03	-.09
10 クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	.53	-.10	-.08	.07	.38
2 授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	-.06	.75	.01	-.16	.03
3 授業に遅刻しないようにする	-.08	.74	-.18	-.06	.16
8 授業で出された宿題や課題はきちんとやる	.06	.71	-.01	.01	-.04
4 履修登録した科目は途中で投げ出さない	.05	.71	-.19	.10	-.03
9 レポートやテストを提出する前に見直す	.06	.55	.14	.04	-.09
25 できるかぎり良い成績をとろうとする	.03	.48	-.04	.29	.01
5 授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	.10	.43	.13	-.02	.14
18 授業で配布された資料などを整理する	.00	.36	.32	.09	-.05
6 授業中に私語をしない	-.08	.36	.12	-.14	.18
17 授業で興味をもったことについて自主的に勉強する	.01	-.12	.89	-.03	.06
19 授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する	.07	-.08	.76	.05	-.09
16 授業でわからなかったことは、自分で調べる	-.07	.08	.61	-.04	.24
23 計画を立てて勉強する	-.05	.01	-.04	.82	.03
24 自分の意思で継続的に勉強する	-.02	.06	.20	.87	-.01
22 大学以外の学校などに通って勉強する	.02	-.27	-.11	.48	.25
21 資格や免許の取得をめざして勉強する	.03	.12	.05	.48	-.07
1 授業の予習をする	-.03	.11	-.03	.05	.65
15 授業の復習をする	-.07	.07	.17	.07	.63
7 授業でわからなかったことは先生に質問する	.24	.06	.06	.00	.44
因子間相関					
I	-	.29	.44	.48	.41
II		-	.54	.44	.38
III			-	.56	.55
IV				-	.52
V					-

表2

- 大学における学習への取り組み26項目の因子分析(主因子法, Promax回転)
 - 「全くあてはまらない(1)」~「とてもあてはまる(4)」の4件法の回答。
 - ただし、十分な因子負荷量を示さなかった2項目は除外。
- 5つの因子を析出
 - I ディスカッション等への貢献
 - II 受講の基本的マナーの遵守
 - III 興味に基づいた自主学習
 - IV 計画的・継続的自主学習
 - V 授業の予習・復習

表3 高校での学習への取り組み別に見た大学での学習への取り組み

	高群		低群		t値	
	平均値	SD	平均値	SD		
I ディスカッション等への貢献	11.97	3.55	9.92	3.42	-9.38	***
II 受講の基本的マナーの遵守	30.03	3.99	26.90	5.07	-10.99	***
III 興味に基づいた自主学習	8.63	1.97	7.49	2.20	-8.68	***
IV 計画的・継続的自主学習	9.91	2.34	8.02	2.50	-12.41	***
V 授業の予習・復習	4.60	1.04	4.94	0.96	5.29	***

*** p<.001

表3

■ 高校での学習態度11項目の合計値によって学生を二分。中央値27を基準に、28以上を「高群」、27以下を「低群」と分類。初年次生では、高群478名、低群539名。

注：11項目とは、前出の8項目に、次の3項目を追加したもの。「勉強方法を自分なりに工夫した。」、「テストで間違えた問題をやり直した」、「嫌いな科目も一生懸命勉強した。」である。

■ 「大学における学習への取り組み」の下位尺度得点を比較すると、I～IVでは高群の平均が低群のそれよりも上回り、Vにおいてはその反対に、低群が高群を上回る。

■ 高校での学習態度は、大学での学習態度と関連があると考えられる。

4 大学における学習態度と高校での学習経験・大学での学習経験との関連

表4 「総合的な学習の時間」の学習経験と大学での学習への取り組み(初年次低群の学生)

	I ディスカッション等への貢献					III 興味に基づいた自主学習				
	よくあった		ほとんどなかった			よくあった		ほとんどなかった		
	平均値	SD	平均値	SD	t値	平均値	SD	平均値	SD	t値
学校や地域の図書館を利用した	10.34	3.73	9.30	3.40	-1.80	8.02	2.46	7.25	2.29	-1.98 *
インターネットを利用した	10.12	3.39	9.43	3.56	-1.76	7.78	2.18	7.34	2.26	-1.75
調べたことを友だちと話し合った	10.53	3.68	9.15	3.56	-2.68 **	7.94	2.42	7.02	2.28	-2.76 **
調べたことを図や表にまとめた	10.50	3.53	9.55	3.46	-1.57	7.72	2.57	7.34	2.22	-0.97
調べたことを文章にまとめた	11.05	3.37	9.25	3.42	-3.73 ***	7.73	2.50	7.14	2.24	-1.80
友だちと協力して発表資料をまとめた	10.97	3.67	9.57	3.45	-2.11 *	8.07	2.42	7.30	2.20	-1.82
調べたことを人前で発表した	11.54	3.90	9.66	3.43	-3.50 **	7.50	2.36	7.31	2.21	-0.56

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表4

■ 友人との協力や成果の発表の経験は学習態度 I と関連。

表5

■ 補習よりも、演習やアクティブ・ラーニング、コミュニケーションを図る授業経験は学習態度 I, III, IVを中心に関連。スキルの講義にとどまらぬ工夫が必要？演習 V は授業経験とは負の相関。

表5 大学での授業経験と大学での学習への取り組み(初年次低群の学生)

平均値(SD)

	I ディスカッション等への貢献			II 受講の基本的マナーの遵守			III 興味に基づいた自主学習			IV 計画的・継続的自主学習			V 授業の予習・復習		
	多い		少ない	多い		少ない	多い		少ない	多い		少ない	多い		少ない
	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値
補習授業	10.16	9.79	1.21	27.48	26.58	1.97	7.48	7.50	-0.08	8.21	7.92	1.26	4.24	5.31	-14.62
	(3.42)	(3.42)		(4.52)	(5.33)	*	(2.02)	(2.29)		(2.46)	(2.52)	**	(0.81)	(0.81)	***
勉強方法の授業	10.30	9.73	1.79	27.38	26.67	1.53	7.82	7.34	2.36	8.44	7.83	2.68	4.49	5.15	-7.62
	(3.44)	(3.40)		(4.48)	(5.32)		(2.25)	(2.16)	*	(2.62)	(2.42)	**	(0.98)	(0.87)	***
少人数ゼミ・演習	10.55	9.31	4.27	27.18	26.62	1.28	7.61	7.38	1.18	8.33	7.73	2.82	4.68	5.19	-6.37
	(3.37)	(3.37)	***	(4.58)	(5.50)		(2.17)	(2.23)		(2.50)	(2.47)	**	(0.98)	(0.86)	***
グループワーク等の導入	11.03	9.05	6.95	27.53	26.40	2.57	7.70	7.32	2.00	8.24	7.85	1.84	4.39	5.36	-13.26
	(3.42)	(3.17)	***	(4.60)	(5.37)	*	(2.19)	(2.19)	*	(2.53)	(2.46)		(0.91)	(0.76)	***
ディスカッションの導入	11.41	9.07	8.07	27.43	26.59	1.85	7.89	7.26	3.21	8.50	7.75	3.36	3.99	5.47	-25.36
	(3.31)	(3.20)	***	(4.80)	(5.21)		(2.30)	(2.11)	**	(2.48)	(2.47)	**	(0.67)	(0.62)	***
プレゼンテーションの導入	11.19	9.11	7.17	27.53	26.50	2.30	7.81	7.29	2.68	8.44	7.76	3.08	4.42	5.27	-10.85
	(3.26)	(3.28)	***	(4.62)	(5.31)	*	(2.20)	(2.17)	**	(2.44)	(2.50)	**	(0.93)	(0.82)	***
教員と学生のコミュニケーション	11.09	9.28	6.04	27.43	26.61	1.79	8.08	7.17	4.65	8.61	7.70	4.10	4.01	5.44	-23.35
	(3.40)	(3.27)	***	(4.50)	(5.34)		(2.15)	(2.16)	***	(2.48)	(2.45)	***	(0.70)	(0.65)	***
学生の意見・授業評価の反映	11.00	9.35	5.43	27.93	26.36	3.80	8.05	7.20	4.52	8.71	7.67	4.67	4.48	5.17	-8.17
	(3.25)	(3.38)	***	(3.98)	(5.49)	***	(1.94)	(2.27)	***	(2.39)	(2.48)	***	(0.98)	(0.85)	***

注 「多い」とは「よくあった」+「ある程度あった」の合計、「少ない」とは「あまりなかった」+「ほとんどなかった」の合計。* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表6 大学教育に対する選好と大学での学習への取り組み(初年次低群の学生)

平均値(SD)

	I ディスカッション等への貢献			II 受講の基本的マナーの遵守			III 興味に基づいた自主学習			IV 計画的・継続的自主学習			V 授業の予習・復習		
	A		B	A		B	A		B	A		B	A		B
	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値
Aあまり興味なくとも単位を楽にとれる授業 B単位をとるのが難しくても自分の興味のある授業	9.59	10.26	-2.27	26.20	27.64	-3.33	6.87	8.15	-7.03	7.70	8.37	-3.14	4.98	4.89	1.13
	(3.25)	(3.57)	*	(4.73)	(5.33)	**	(2.05)	(2.16)	***	(2.44)	(2.52)	**	(0.95)	(0.96)	
A出席や平常点を重視して成績評価をする授業 B定期試験や論文等を重視して成績評価をする授業	9.61	10.77	-3.27	27.19	26.08	1.93	7.31	7.99	-2.93	7.91	8.33	-1.57	4.97	4.84	1.37
	(3.22)	(3.82)	**	(4.46)	(6.41)		(2.06)	(2.47)	**	(2.36)	(2.84)		(0.94)	(1.01)	
A応用・発展的内容は少ないが基礎・基本が中心の授業 B基礎・基本は少ないが応用・発展的内容が中心の授業	9.66	10.73	-3.14	27.13	26.15	1.61	7.25	8.24	-4.53	7.90	8.40	-1.99	4.96	4.88	0.82
	(3.32)	(3.61)	**	(4.54)	(6.43)		(2.10)	(2.34)	***	(2.41)	(2.72)	*	(0.95)	(0.97)	
A教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多い B学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多い	9.75	11.00	-2.57	27.21	24.86	2.76	7.42	7.97	-2.02	8.01	8.11	-0.32	4.97	4.74	1.78
	(3.31)	(3.95)	*	(4.62)	(7.04)	**	(2.16)	(2.37)	*	(2.48)	(2.61)		(0.94)	(1.03)	
A大学での学習の方法は大学の授業で指導を受ける B大学での学習の方法は学生が自分で工夫する	9.48	10.27	-2.67	26.34	27.35	-2.30	6.90	7.97	-5.74	7.62	8.35	-3.37	5.01	4.88	1.65
	(3.32)	(3.47)	**	(4.73)	(5.30)	*	(2.06)	(2.20)	***	(2.42)	(2.52)	**	(0.96)	(0.95)	

注 設問のA, Bの文末はいずれも「～がよい」となっており、どちらの考え方に自分が近いかを尋ねている。

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

■ 学習態度は大学教育に対する選好の違いに表れている。

5 まとめ

- 入学後、大学教育のスタイルに合わせて基本的学習態度が向上する面もあるが、「教員への質問」では消極的、「自分で調べる」、「計画的に勉強する」では変化なし。「教員への質問」、「自分で調べる」は、学年進行とともにほとんど向上しない。
- 初年次生は予習・復習にはまじめに取り組むが、グループワークやディスカッションなどへの積極的参加、自主的学習は上級学年に及ばない。
- 高校の学習態度は大学の学習態度に影響する。高校で素地ができている学生は学習態度Ⅰ～Ⅳ因子では高く、Ⅴは低い。
- 高校での総合的学習の経験はⅠに影響。大学でのアクティブ・ラーニングやコミュニケーションを促す授業経験もⅠ、Ⅲ、Ⅳを中心に影響。スキルの指導は実践、演習の経験を重ねてこそ有効。
- 学習態度5因子のなかで、Ⅴは異質。
- 学習態度の改善・向上には大学教育観、授業観の転換も重要。

企画RT「ベネッセ大学生調査から捉える現代初年次学生の特徴—受験勉強スタイル、学習態度、学習成果の観点から—

学習成果に影響を及ぼす要因の検討 —学習経験と学生生活類型を中心に—

山田 剛史

(島根大学教育開発センター)

E-mail: t-yamada@soc.shimane-u.ac.jp

【Research Question】

1. どのような学習(授業)経験が学生の学習成果を高めるのか?
2. どのような学生生活を送っている学生が高い学習成果を得ているのか?

【分析対象】

初年次学生1,017名(内訳: 男611名(60.1%), 女406名(39.9%))

【使用する変数】

1. 学習成果に関する28項目
2. 学習経験に関する19項目
3. 学生生活経験(6種類)へのコミットメントの程度に関する項目
- (4. 進学時の満足度(4段階))

分析1-1. 学習経験と学習成果の関連 (相関分析/r=.300以上のみ抽出)

学習成果	4.実験や調査の機会を取り入れた授業	5.教室外で体験的な活動や実習を行う授業	7.教員と学生が授業時間内にコミュニケーションがとれる授業	8.上級生や下級生と授業時間内にコミュニケーションがとれる授業	9.ネットやメールなどを用い、授業外でもコミュニケーションがとれる授業	13.学生の意見や授業評価の結果を反映させた授業	14.グループワークなどの協同作業をする授業	15.ディスカッションの機会を取り入れた授業	17.コンピュータやインターネットを活用する授業	18.自分の進路や適性について考える授業	19.語学以外の授業で、外国語で行われる授業
1.人と協力しながらものごとを進める							.353	.372			
2.自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる	.306		.303	.311			.349	.374			
3.異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる							.317	.366			
5.自分の知識や考えを図や数字を用いて表現する	.309			.302							
6.コンピュータを使って文書・発表資料を作成し表現する									.375		
10.自分の適性や能力を把握する										.326	
11.自分に自信や肯定感をもつ						.307				.304	
12.外国語で読み、書く											.328
13.外国語で聞き、話す											.335
15.コンピュータを使ってデータの作成・整理・分析をする									.409		
19.問題を解決するために、数式や図・グラフを利用する	.334				.302						
20.仮説検証や情報収集のために、実験や調査を適切に計画・実施する	.404	.300									
22.既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出す							.310	.319			
25.社会や文化の多様性を理解し、尊重する			.311			.311					
26.国際的な視野を身につける			.326			.322		.319			.307
28.社会活動に積極的に参加する				.337							

分析1-2. 学習経験と学習成果の関連

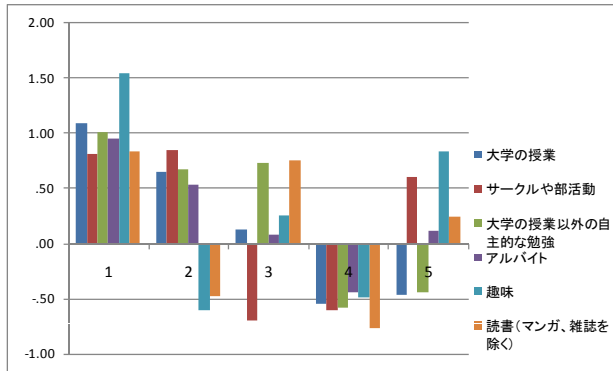
- 前表から以下のような点が特徴として挙げられる。
 - (1)「15.ディスカッションの機会を取り入れた授業(5項目で高い相関)」や「14.グループワークなどの共同作業をする授業(4項目)」といった協調学習形態が、リーダーシップや協調性、創造的思考の養成に寄与していること
 - (2)「4.実験や調査を取り入れた授業(4項目)」は主に数的処理に関わる力の養成に寄与していること
 - (3)「18.自分の進路や適性について考える授業(2項目)」といった所謂キャリア教育が、適性や自己肯定感を高めることに寄与していること
- その他、見られた傾向として以下のようなことが挙げられる。
 - (1)補習教育と学習成果の関連は、-.003～.152と無相関および弱い正の相関
 - (2)スタディ・スキル系授業と学習成果の関連は、.102～.209と弱い正の相関
 - (3)成績と学習成果の関連は、-.164～-.054と無相関および弱い負の相関

⇒それぞれの授業形態(学習経験)が持つ特徴(もたらす学習成果)には一定の傾向がある。目的とする学習成果に応じて効果的と思われる授業形態を適宜採用し、カスタマイズし、実践していくことで、より効果の高い初年次教育の実践につなげることができるかもしれない。
⇒大学で学ぶ方法はそれそのものが学習成果を高めるというよりも、学生の参加を促すような「しかけ」が組み込まれているかによって高められている可能性が伺える。

分析2-1：学生生活類型による学習成果の差異（クラスタ分析）

<Step1>

6つの学生生活経験(1.大学の授業, 2.サークルや部活動, 3.授業以外の自主的な勉強, 4.アルバイト, 5.趣味, 6.読書)への関与度に基づき、クラスタ分析により学生生活類型を導出(標準化得点の高低により5つのクラスタを作成(下図表))。



クラスタの特徴	人数(%)
CL1(全ての活動に積極的な学生群)	48 (10.3)
CL2(正課・正課外活動への積極的参加群)	79 (16.9)
CL3(自主的学習重視群)	96 (20.6)
CL4(全ての活動に消極的な学生群)	155 (33.2)
CL5(正課外活動への積極的参加群)	89 (19.1)
計	467 (100.0)

* 当該項目では、「5.とても力を入れた」から「1.全く力を入れなかった」までの5段階で聞いており、その他に「大学生活ではやっていない」という回答も設けている。本分析では、この「やっていない」と回答している学生を除外しているため、人数が少なくなっている。

Copyright © 2008 Tsuyoshi Yamada, All rights reserved.

分析2-2：学生生活類型による学習成果の差異（因子分析）

<Step2>

学習成果28項目の因子分析(主因子法, Promax回転)により統計的に関連の高い項目群(因子)を導出。固有値の落ち込みや信頼性係数(α)などから4因子解(F1.全般的技能(18項目), F2.数的処理(5項目), F3.外国語(3項目), F4.積極的態度(2項目))が妥当と判断(右表)。

項目内容	F1	F2	F3	F4
17 ものごとを批判的・多面的に考える	.736	-.002	-.039	-.049
25 社会や文化の多様性を理解し、尊重する	.722	-.193	.092	.067
27 社会の規範やルールにしたがって行動する	.710	-.072	-.042	-.017
16 多様な情報から適切な情報を拾取選択する	.699	.138	-.006	-.085
7 進んで新しい知識・能力を身につけようとする	.697	.038	.038	-.020
3 異なる意見や立場をふまえて、考えをまとめる	.690	.043	.056	.182
23 幅広い教養・一般常識を身につける	.677	-.039	.109	-.076
14 文献や資料にある情報を正しく理解する	.635	.221	.037	-.126
9 自分の感情を上手にコントロールする	.631	-.069	-.058	.089
18 現状を分析し、問題点や課題を発見する	.624	.162	-.066	.078
21 筋道を立てて論理的に問題を解決する	.583	.220	-.030	.023
10 自分の適性や能力を把握する	.567	.013	-.039	.198
4 自分の知識や考えを文章で論理的に書く	.567	.181	.025	-.028
8 自分で目標を設定し、計画的に行動する	.552	.062	-.006	.169
11 自分に自信や肯定感をもつ	.508	-.064	-.009	.304
1 人と協力しながらものごとを進める	.494	.031	-.042	.216
24 専門分野の基礎的な知識・技術を身につける	.427	.321	.018	-.121
22 既存の枠にとらわれず、新しい発想やアイデアを出す	.421	.035	.020	.331
19 問題を解決するために、数式や図・グラフを利用する	-.214	.792	.005	.227
15 コンピュータを使ってデータの作成・整理・分析をする	.099	.710	.035	-.174
5 自分の知識や考えを図や数字を用いて表現する	-.098	.645	-.014	.313
6 コンピュータを使って文書・発表資料を作成し表現する	.327	.529	.042	-.248
20 仮説検証や情報収集のために、実験や調査を適切に計画・実施する	.056	.485	-.023	.312
13 外国語で聞き、話す	-.075	.014	.886	.102
12 外国語で読み、書く	-.027	.072	.817	.021
26 国際的な視野を身につける	.340	-.098	.425	.143
2 自ら先頭に立って行動し、グループをまとめる	.209	.028	.016	.551
28 社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)に積極的に参加する	-.046	-.023	.140	.507

分析2-3：学生生活類型による学習成果の差異（分散分析）

<Step3>

学生生活類型による学習成果の差異について検討するため、5つの学生生活類型を独立変数、4つの学習成果因子を従属変数とした一要因分散分析を行ったところ、全ての因子で1%水準の有意差がみられた。

学習成果因子	各クラスタの平均値					F値	多重比較(Tukey)
	CL1	CL2	CL3	CL4	CL5		
F1.全般的技能(range18-72)	48.9	45.9	41.9	37.4	41.1	22.68 (p < .01)	1 > 2 > 3, 5 > 4
F2.数的処理(" 5-20)	13.9	13.3	12.5	11.2	11.7	11.82 (p < .01)	1, 2 > 4, 5 / 3 > 4
F3.外国語(" 3-12)	8.6	8.6	7.6	6.9	7.5	11.02 (p < .01)	1, 2 > 4, 5 / 2 > 3
F4.積極的態度(" 2-8)	6.4	6.3	6.0	5.5	6.0	6.30 (p < .01)	1, 2, 3 > 4

* 各クラスタは、「CL1.全ての活動に積極的な学生群」「CL2.正課・正課外活動への積極的参加群」「CL3.自主的学習重視群」「CL4.全ての活動に消極的な学生群」「CL5.正課外活動への積極的参加群」を示している。

⇒CL1, CL2など正課・正課外活動に積極的にコミットしている学生の学習成果は高く、CL4のように、全ての活動に消極的な学生の学習成果は低い。
⇒CL5のように、サークルや部活動、趣味など正課外活動にのみ傾倒している学生の学習成果は低い。

⇔学習成果の獲得は「授業(学習)」が基盤となっている

Copyright © 2008 Tsuyoshi Yamada, All rights reserved.

分析2-4：学生生活類型による学習成果の差異（クロス集計）

<問い>

CL1やCL2の学習成果が高いことが確認されたが、そういった学生は入学時から「良い形」で入ってきているのか？入学時の満足度との関連で見てみる。

学習成果因子	各クラスタの平均値					合計
	CL1	CL2	CL3	CL4	CL5	
ぜひ入りたいと思って進学した	12 (25.0)	14 (17.7)	39 (40.6)	79 (51.0)	34 (38.2)	178 (38.1)
まあ満足して進学した	17 (35.4)	39 (49.4)	39 (40.6)	60 (38.7)	38 (42.7)	193 (41.3)
やや不満足だが進学した	8 (16.7)	12 (15.2)	11 (11.5)	8 (5.2)	13 (14.6)	52 (11.1)
やむを得ず進学した	11 (22.9)	14 (17.7)	7 (7.3)	8 (5.2)	4 (4.5)	44 (9.4)
計	48 (100.0)	79 (100.0)	96 (100.0)	155 (100.0)	89 (100.0)	467 (100.0)

* 各クラスタは、「CL1.全ての活動に積極的な学生群」「CL2.正課・正課外活動への積極的参加群」「CL3.自主的学習重視群」「CL4.全ての活動に消極的な学生群」「CL5.正課外活動への積極的参加群」を示している。

⇒CL1やCL2から、進学時の満足度は、学生生活経験への関与度の高さや直接的に関係していないことが伺える。むしろ不満足感を基盤として、あらゆる活動に積極的にコミットし、そのことが高い学習成果を生み出している可能性も見えてくる。
⇒逆に、CL4に顕著のように、進学時に高い満足度を有している学生が、あらゆる活動に消極性ひいては低い学習成果を示しており、この背後に潜む学業へのつまづきや学生心性について更に高学年次への移行も含めて詳細な検討が必要。

Copyright © 2008 Tsuyoshi Yamada, All rights reserved.

論点～今後の課題～

- 学習経験と学習成果をセットにして考える(更には学習態度もセットで)
- 学生の学習の問題を, 学生の生活経験全体(経験領域 × 認知領域)の中で捉える
- 質問紙方式による方法論的限界(トライアングレーションの必要性)
- 具体的な実践の中に落とし込んで多角的かつ継続的な検証が必要(分野別へと展開)

(9/20/2009)

ベネッセ大学生調査から捉える現代初年次学生の特徴
-ラウンドテーブルのコメントとして-

初年次教育学会大会
ラウンドテーブル
関西国際大学

山田礼子
(同志社大学)

大学教育の改善のために

「学生本位の改革」を推進するには、
学生に関する教務情報と学生調査等の評価
データを総合的に分析し、改善に活かす必要



- 学生調査をベースラインデータとして利用

アセスメントの分類

- 直接評価と間接評価



直接評価＝ダイレクト・エビデンス＝学習成果の評価

内容＝科目試験、レポート、プロジェクト、ポートフォリオ、卒業試験、
卒業研究や卒業論文、標準試験

時期＝入学時、学期中、学期末、卒業時

間接評価＝インダイレクト・エビデンス＝学習プロセスの評価＝学習行動、
生活行動、自己認識、大学の教育プログラムへの満足度等成果にいた
るまでの過程

内容＝学生調査、卒業生調査等

時期＝入学時、1年次終了時、上級学年時、卒業後

間接評価からどこまでわかるか

- 望月先生 間接評価 入試に焦点
- 杉谷先生 間接評価
高校時代の学習態度と大学での学習態度
- 山田先生 間接評価
学習経験と学生生活類型

異なる視点を組み合わせることで学生のマクロ
な姿を把握することができる

分析結果から考えたこと

- 望月先生 受験勉強のスタイルの変化が学習態度に影響をおよぼすのでは？
- 現状「志望理由書・自己推薦書の作成」「面接の準備」に取り組んだ学生の増加
- 低学年ほどこうした受験勉強経験が高い傾向
- こうした受験勉強経験のある初年次生は同学年全体の平均値よりも高い側面



授業に対する基本姿勢の高い傾向
「積極性・自主性・計画性・継続性」は低い傾向

受験勉強スタイルによる要因以外との関係性は？
他の要因の影響力の度合は？

分析結果から考えたこと

- 杉谷先生 学生の生活時間調査
3つの検討課題
 - 高校から大学にかけての学習態度の変化は？
 - 大学における学習態度と高校における学習態度との関連性は？
 - 大学における学習態度と高校・大学での学習経験との関連性は？



高校での学習態度と大学での学習態度との関連性

高校時代に身についた態度や志向性を変化させるのは
大学での異なる授業方法？
既に身につけているinputはどの程度変えられるのか？

分析結果から考えたこと

- 山田先生
 - 高い学習成果を得ている学生の学生生活の状況は？

積極的にコミットしている学生の成果は高い。
消極的な学生の成果は低い。
先行研究成果と一致
学生のタイプ分類の普遍化か？

解明すべき点

進学時高い満足群→消極性 低い学習成果
進学時低い満足群→積極性 高い学習成果



興味ある結果。しかし、変化の過程をどう把握していくのか？

分析結果からの示唆と調査の限界

マクロな学生の状況を把握



学生分類枠組みの提示

調査手法の限界 インターネット調査

- 学生と機関の特性の関係性を把握するのが困難
- 大学教育をどう学生に還元するかの方針を描きにくい

科学的な学生研究の蓄積

学生の科学的分析

客観的データに基づく現状評価文化の醸成

* 継続の必要性

- ・短期的には...定期的に学生の変化を把握
 - ⇒ マクロな学生の分類、動向の把握
- ・長期的には...やはり機関との関係性を明らかに
 - ⇒ 学生と機関との相性、機関の特徴